

全電源喪失の記憶

証言 福島第1原発

8

■ 第3章「制御不能」

ア版

4年(平成26年)5月26日(月曜日)

「はが野郎つ」。福島第1原発所長の吉田昌郎(56)は声を荒らげた。3月12日午後7時20分ごろ、首相官邸にいた東京電力フェロー武黒一郎(64)から1号機への海水注入を止めよう電話で指示を受け、切った直後のことだった。首相が海水注入に問題がないか懸念しているのだといふ。なぜ現場を見ていない人の判断が優先されるのか。納得いかない吉田はテレビ会議で本店に相談した。そこで「武黒さんが電話でワンワン言つてゐんですけど、本店は何か聞いてますか」

途絶えなかつた海水



原子炉への注水に使われた消防車
2011年3月16日、福島第1原発(東京電力提供)

所長が芝居注入系統

「何かさうきそんなこと言つてたな。でも官邸が言つてるんなら仕方がないだらう」

「今入れていいのはどうするんですか」

「試験注水だったといつこにじて、いつたん止めればいいだらう」

「海水を入れて何か問題があるのだろうか。吉田は緊急時対策本部の円卓に座る第2復旧班長曳田史朗(55)に相談した。

「なあ曳田、海水入れて大丈夫だよな」

曳田は誰よりも1~6号機の構造に精通している。吉田が最も信頼していた部下であり、同じ年の友であつた。

もあつた。

「何言つてんの、吉やん。3号機以降はもしもの時に原子炉に海水を直接入れられる設計になつてゐるよ。だから1号機でも全然問題ないって」

吉田はわが意を得たりといつた様子うなずいた。曳田が言う。

「吉やんは人に相談する時にはもう決めてるんですよ。決めてるんだ

けれど、確信を得たい。だから私は背中を押したつもりでした」

吉田は自分の席に戻ると、注水現場に指示を出している防火・防災のたとしてテレビ会議で「注水再開」

責任者に向かつて両腕を交差させを宣言したが、実際には一度も中断

「バツ」をつくつてみせた。だがこれはしなかつた。

れだけでは何の意味か通じるはずも吉田は後に、部下にこう語つた。

「最後は俺の判断だと思ったんだ。吉田は円卓を回り込んで責任者の脇に行き、こう耳打ちした。

「いいか、これから俺が一芝居打つ。何があつても注水は止めるな

誰にも悟られてはならない。午後7時25分、吉田は自席にあるテレビ会議のマイクのスイッチを入れた。

「え、首相から海水注入に問題

がないか検討するよう指示を受けま

したので、試験注水をいつたん中止します。これに従いますが、すぐに復旧できるよう武黒フェローが交渉

本店幹部や対策本部の数百人の作業員は注水が中断したと信じた。吉

田は午後8時10分、官邸の許可が出

海水を入れて何か問題があるのだ

ろうか。吉田は緊急時対策本部の円

卓に座る第2復旧班長曳田史朗(55)を宣誓したが、実際には一度も中断

されなかつた。吉田は後に、部下にこう語つた。

「最後は俺の判断だと思ったんだ。吉田は円卓を回り込んで責任者の脇に行き、こう耳打ちした。

「いいか、これから俺が一芝居打つ。何があつても注水は止めるな

通信 高橋秀樹